2017/01/24

福浦厚子（滋賀大学教員）

＜コンバット・ストレスとは＞

コンバット・ストレスとは、Combat Operational Stress の総称であり、戦闘経験だけでなく、軍事作戦や演習でストレスに晒された軍人に見られる感情的、知的、身体的そして/また行動上の反応である。それらは、隊員にたいして感情、認知、生理学上の影響を及ぼすだけでなく、配偶者や子どもといった周囲の人に対しても影響を及ぼす。

戦闘や作戦によるストレスだけでなく、演習など戦闘以外の状況でのストレスも、コンバット・ストレスに含まれるため、そのダイナミズムに注目する必要がある。

現在、コンバット・ストレス反応は一般に数週間から数か月といった短期間のものを指し、急性ストレス障害やPTSDと類似しているが異なるものとされる。コンバット・ストレスはひどい症状が出る場合もあるが、正常化に向かう過程と見なされている。つぎのような症状が現れる。

＜コンバット・ストレス反応＞

感情的な反応として：
いらいら、気分の変動、以前よりも強い恐れや不安、悲しみや絶望の感情、悪夢やフラッシュバックなど

身体的な反応として：
身体の痛み、眠りすぎや、眠れないなどの睡眠障害、激しい動悸や汗、呼吸が苦しくなること、食欲不振や増加などの変化、女性の場合、月経周期の変化など

精神的な反応として：

集中力の欠如、ストレスのかかる出来事にたいして強迫観念を抱く、死についての念慮、衝動的攻撃性や判断力の欠如など

行動上の反応として：
アルコールやそれ以外のものの摂取が増える、戸締り確認などのような強迫行動が増える、怒りの感情の増加：他者と敵対したり、ものを投げたり壊したり、他の人からの孤立、性行動の減退など

＜PTSD (=心的外傷後ストレス障害)とは＞

それにたいしてPTSDはある種の機能を喪失した、精神障害とされる。PTSDの診断には、いくつかのトラウマとなる特徴的な出来事、死や深刻な負傷、性的暴力などが起こったあるいは起こりそうになったという経験により症状が現れる。

さらに、何度も同じ夢をみたり、フラッシュバックや同じイメージが繰り返し現れるといった、追体験の症状も現れる。また忌避の症状、例えばある出来事やそれに関わった人について話すことを忌避したり、記憶を喪失することがある。

それと並んで、睡眠障害やいらいら、怒り、集中力の欠如、過度の警戒や驚愕といった症状が現れることがある。コンバット・ストレス反応とPTSDの症状がオーバーラップしている場合もある。ただし、適切な対処を誤ると、コンバット・ストレスがPTSDやうつ病、アルコール問題といった形に変わっていくため、慎重に対処する必要がある。

＜コンバット・ストレスは一過性のものか＞

このようにコンバット・ストレスは軍事組織の活動全般により、それに関わる誰もが抱えうるストレスとそれへの反応の総称としてあり、軍務によって一時的に加わったストレスにたいして、正常な状態へと戻っていく過程にある反応と見なされている。その

一方で、適切な対処を怠ると医学的な治療を必要とするPTSDやうつ病などの症状が現れるゲートウェイに位置づけられている。
それでは、一過性とされるコンバット・ストレスは、数週間から数か月の間に症状を現わしたとしても、その後跡形もなく終息すると理解してよいのであろうか。たとえ一時的であったとしても、その間、隊員はだれにも会わずに過ごすわけではない。家族や職場などの人たちと過ごす日常のなかで、先述のような身体的、精神的な反応を現わすのである。それを一過性と呼ぶことによって、見えなくしていることがあるのではないだろうか。

＜イラク派遣の事例＞

2003年から2009年にかけて行われた自衛隊のイラク派遣では、8000人以上の隊員が派遣された。その際には自衛官本人だけでなく、家族もさまざまな経験をしている。ある幹部自衛官はイラクから戻ってきたあと、通常の業務に就いていたが、頭痛のため休日は静養を取ることが多くなった。ちょっとした言葉にも敏感に反応するといったように、感情の起伏が大きくなった彼にたいして、妻は小さい子を抱えながら、腫れ物に触るような思いで過ごす。その後、彼はストレス障害で数か月入院することになったが、妻は帰国後の夫と過ごす日常の変貌ぶりに戸惑い、自分もカウンセリングを受けておくべきだったと述懐している。コンバット・ストレスは、一過性の症状であっても、その影響は配偶者や子どもにまで及ぶものとして認識しておく必要がある。

＜二次的トラウマ化＞

海外の軍隊に関する研究では、PTSDを抱える軍人だけでなく、彼らが帰還後に生活を共にするなかで配偶者や子どもなど身近な人も同様の症状を発生させる、二次的トラウマ化の問題に関心が広がっている。
二次的トラウマ化とは、トラウマを抱えた個人が経験する症状が、身近な人にも経験されるようになることを指しており、悪夢の転位や侵入思考、フラッシュバックなどが、PTSDを抱える人の

身近な家族や友人にも起こり、PTSDに似た苦悩が現れることをいう。

このストレスを蓄積させると、感情的消耗やバーンアウトが導かれ、二次的トラウマ・ストレス障害(Secondary Traumatic Stress Disorder)を引き起こす。その症状はPTSDと似ており、過剰な警戒心や記憶の回避、感情や行動の麻痺、引きこもりなどがある。

最も家族に影響を与えるのは、自暴自棄や別居、離婚などによる家庭崩壊である。PTSDを抱える人がもつ感情の起伏や警戒心などが家族に影響を与え、その結果子どもが発達上の問題を抱えやすくなるという研究もある(Kulka et al 1988; Klerie et al 2013)。

PTSDをもつ退役軍人の妻が、PTSDのない退役軍人の妻と比べて、うつ病、強迫性障害、不安、対人関係過敏、敵意、身体的不調を抱えたり、社会的ネットワークにたいする不満や孤立感が高くなる傾向にあり(Solomon et al 1992)、このような二次トラウマ化は国や時代が異なっても現れうることが指摘されている(Dekel & Solomon 2006)。

コンバット・ストレスはたしかに隊員が組織の成員として経験することではあるが、それを契機として、場合によっては配偶者や身近な人だけでなく、子どもにも影響を及ぼす点に注目し、ありとあらゆる事態に目を向けなければならない。海外派遣から戻ってきた自衛官はもちろんのこと、配偶者や子どもたちにたいしてもこれらのことに留意する必要がある。また派遣先は海外であったとしても、事態はだれにとっても地続きの話であり、明日の私の姿を映している。